体験学

フラメンコのトリコ ④

歌・踊り・ギター 一体感が命

「愛好家として息長く」に共感

「ちょっと、ちょっと、今の何？ ダメダメ。もう一度やり直し！」

3月6日、東京・新宿のタブラオ「エル・フラメンコ」の店内はピリピリと張り詰めた空気に包まれていた。フラメンコ教室「エストゥディオ・ブレーニャ」の生徒による舞踊発表。リハーサルで、教室を主宰する大沼由紀先生が出演者に厳しいチェックを入れていた。

合唱の演奏会でも直前練習は胃が痛くなる。この日の本番はフラメンコファンでぎっしり埋まった客席から、計24人の息の合った群舞に大きな拍手が送られた。日ごろの猛練習のたまもので、大成功である。

息が合っていたのは、踊り手同士だけではなかった。フラメンコはカンテ（歌）、バイレ（踊り）、ギターの3者の連携が生命線で「カンテとバイレは切っても切れない。基本的に録音ではない、生の歌で踊るのが、フラメンコと他のダンスとの大きな違い」と大沼先生。

カンテ、バイレ、ギターがお互いにコミュニケーションを取りながらその場のアドリブで合わせるのもフラメンコの真骨頂。「バイレに余裕がないと、その即興の楽しさもわからない」。サパテアードで苦労している私は、軽い絶望感を覚えた。先は長い。

フラメンコの発表会でカンテを歌う西容子さん㊥（3月6日、東京・新宿の「エル・フラメンコ」）

発表会でそのカンテを務めた一人が、都内の不動産ファンド運用会社に勤める会社員、西容子さん（44）。地声を絞り出すように張り上げ、感情がそのままメロディーになったような力強い歌い方。聴く者の腹と心にびんびん響く。私がずっと合唱で続けてきたクラシック声楽の「ベルカント唱法」とはまったく違う。「カンテは伝承歌謡なので楽譜がない。音源を聴いて耳で覚えるしかない」。また驚いた。

「仕事以外に何か楽しいことを」という思いで陶芸やボイストレーニングなど様々な教室に通った。しかし「熱しやすく冷めやすい」性格のため、どれも長続きしなかったという。1995年、旅行で訪れたスペイン・アンダルシアのセビリアでフラメンコに出合った。「これ何？」。踊り手のオーラに大きな衝撃を受け、帰国後、カルチャーセンターでバイレのレッスンを重ねた。「仕事も含め毎日が楽しくなった」

98年に3カ月セビリアでバイレを勉強したにもかかわらず、日本ではカンテに「転向」。セビリアで「カンテが人々の生活に息づいている」と感じたという。

「フラメンコの一体感が好き。プロでなく『愛好家』として歌い続けていきたい」。そんな西さんのアドバイスは、「窮めようなんて大上段に構えずに、まずはネットの動画サイトでフラメンコを見て、気になるカンテやバイレやギターなどを探してみたら」。仕事を持ちながらフラメンコを楽しみたい人には、救いの言葉である。